出家とその弟子

倉田百三

唯円　お師匠様、あの（顔を赤くする）恋とはどのやうなものでございませうか。

（略）

親鸞　（まじめに）苦しいものだよ。

唯円　恋は罪の一つで御座いませうか。

親鸞　罪に絡まつたものだ。此の世では罪をつくらずに恋をすることは出来ないのだ。

唯円　では恋をしてはいけませんね。

親鸞　いけなくても誰も一生に一度は恋をするものだ。人間の一生の旅の途中にある関所のやうなものだよ。その関所を越えると新しい光景が眼の前に展けるのだ。此の関所の越え方の如何で多くの人の生涯はきまると云つてもいい位だ。

唯円　そのやうに重大なものですか。

親鸞　二つとない大切な生活材料だ。真面目に此の関所にぶつかれば人間は運命を知る。

－19－

愛を知る。すべての知恵の芽が一時に目醒める。魂はものの深い本質を見る事が出来るやうになる。いたづらな、浮いた心で此の関所に向へば、人は盲目になり、ぐうたらになる。その関所の向ふの涼しい国をあくがれる力がなくなつて、関所の此方で精力がつきてへとへとになつてしまふのだ。

唯円　では恋と信心は一致するもので御座いませうか。

親鸞　恋は信心に入る通路だよ。人間の純な一すぢな願ひをつき詰めて行けば、皆宗教的意識には入り込むのだ。恋するとき人間の心は不思議に純になるのだ。人生のかなしみが解るのだ。地上の運命に触れるのだ。そこから信心は近いのだ。

唯円　では私は恋をしてもよろしいのですか。

親鸞　（ほほゑむ）お前の問ひ方は愛らしいな。私はよいとも悪いとも云はない。恋をすればするでよい。ただまじめに一すぢにやれ。

唯円　あなたも恋をなさいましたか。